

# 令和5年度 特色ある教育実践研究校（道徳教育）報告書

## □田中学校

### 1 学校の課題

本校の生徒は集団の学びの中で、規範意識をもち、楽しく学校生活を送っていると感じている生徒は多い。しかし、一方で、良質な人間関係づくりが苦手な自分を表現することができずに思い悩む生徒や、相手の気持ちを理解することができずに思いがけないトラブルに発展したり、集団生活に溶け込めないまま不登校になってしまったりする生徒もいる。ともすると、生徒の規範意識や楽しく学校生活を送っているという認識も、自分よがりであったり、他人と同調することで自身の思いをあきらめてしまったりしている感が否めない。

全国学力調査では、「学校に行くのは楽しいと思いますか。」「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」の項目では全国平均を下回る結果であった。

| 指標   | 自校   | 県    | 国    |
|--|------|------|------|
| 学校に行くのは楽しいと思いますか。                                | 79.3 | 81.7 | 81.8 |
| 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。 | 78.8 | 81.0 | 79.7 |

〈R4全国学力調査〉 %

### 2 研究主題

あたたかく笑顔で学び合う生徒の育成  
—道徳を柱とした関わり合う学び合いを通して—

### 3 取組内容

道徳教育が生徒の現実の困難な問題に主体的に対処できる実行力を育成するうえで大きな役割を果たすことに着目し、道徳教育の要である道徳授業の研究に取り組み、道徳的価値の理解を基にすべての教育活動で自己を見つめ、自分ごととして関わり、多面的な見方・考え方ができる指導の工夫・改善を行った。

#### 1 道徳科の授業づくり

- ・ 「自分ごととして考えることができていますか」「多面的な見方、考え方の広がりはあるか」を視点とした、関わり合う学び合いを取り入れた授業の工夫・改善
- ・ 1学年での、丁寧な生徒の見取り、生徒が広い視野から考える支援、問題の焦点化を行う手立てとするTTの授業
- ・ 学校全体で共通理解・共通認識をもち、教育実践につなげるための、校内授業研究の継続的な実施や相互の授業観察
- ・ 大学から講師を招聘しての研修会の実施

#### 2 道徳の諸価値を意識した教育活動の実践

- ・ すべての教育活動に、道徳教育の内容項目との関連を位置づけた目標の掲示と振り返りや「関わり合う学び合い」の場面設定
- ・ 道徳的心情、実践力を引き出す生徒主体の活動の導入と場面づくり
- ・ 自分の気持ちや考えを相手に伝える力を培う良質なコミュニケーション活動の実践

## 3 各分掌での取組

- ・ 思考力、判断力とともに「自分の気持ちや考えを相手に伝える力」の意図的・計画的・発展的な育成

## 【資料1】各分掌の具体的な取組

|       |  |
|-------|--|
| 教務    | 各教科での関わり合う学び合いを取り入れた授業づくり  |
| 生徒会   | ピアサポート、ボランティア活動、合唱コンクール、生徒会行事等<br>委員会活動(キャンペーンの実施)                     |
| 生徒指導  | 教育相談、生徒理解、インクルーシブ教育、hyper-QU、防犯教室、防災教室<br>メンタルヘルス研修                    |
| 研究    | 道徳・総合・学活と教科等の横断的な学びの構築、コミュニケーション教室<br>ライフスキルを含めたキャリア教育の充実、自己表現のための面接練習 |
| 学年・学級 | 関わり合う学び合いが生まれる掲示・通信<br>学年集会、学年行事、いいとこみつけ                               |

## 4 検証結果

## I 学校評価アンケート

| 評価指標          |                            | 肯定的回答                | 本校    | 全国    |
|---------------|----------------------------|----------------------|-------|-------|
| R5全国学力・学習状況調査 | 自分によいところがあると思いますか。         | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 81.5% | 80%   |
| R5全国学力・学習状況調査 | 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。 | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 81%   | 77.2% |

| 評価指標              |  | 肯定的回答                | R4年度 | R5年度 |
|-------------------|--|----------------------|------|------|
| 学校評価アンケート<br>(生徒) | 安心して学校生活を遅れており、学校に行くのは楽しい。                                 | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 89%  | 93%  |
| 学校評価アンケート<br>(生徒) | ペアやグループ学習での話し合いでは、相手の考えを最後まで聞き、友達の考えを受け止めて、自分の考えをしっかりと伝えた。 | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 95%  | 94%  |
| 学校評価アンケート<br>(生徒) | 授業の内容が分かった。  | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 94%  | 95%  |
| 学校評価アンケート<br>(生徒) | 自分にはよいところがある。  | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 89%  | 93%  |
| 学校評価アンケート<br>(教員) | 自分の夢や身近な目標をもつことができた。                                       | 「よくあてはまる」<br>「あてはまる」 | 79%  | 83%  |

## 2 「関わり合う学び合い」自作アンケート(1・2年生)

| 質問項目            |  | 肯定的回答 | 評価  |
|-----------------|--|-------|---|
| 自作アンケート<br>(1年) | 「私だったら、あなただったら」と考えられた場面や「新たな気づき」があった場面は具体的にどんな場面か。 | 96.8% | ・人には、それぞれ自分のものの見方や考え方があることに気付くことができている。<br>・他者に学ぶことの大切さに気付いている。                       |
| 自作アンケート<br>(2年) | 「私だったら、あなただったら」と考えられた場面や「新たな気づき」があった場面は具体的にどんな場面か。 | 98.4% | ・自分の考えや意見を相手に伝えることの大切さに気付くことができている。<br>・他者の立場を尊重しながら、いろいろなもの見方や考え方があることを理解することができている。 |

### 【1年アンケートの具体的回答例】

|  |
|--|
| 自分の意見は友達も意見が5つほどで、理由も5つ、納得も5つほどある。<br>↓<br>自分の意見も友達も意見が5つほどある。           |
| 自分が絶対の正解!! と思っていたことが、グループを意見を出し合ってみると、違う方向から考えの人がいて、なるほどと納得するところが多々あるから。 |
| 自分の意見にならなければ、友達の意見を聞いて自分の意見にしたり、自分の意見が変わる事があるから。                         |
| 自分では考えつかなかった意見が、他の人からの視点での意見をきくことで、そういう考え方もあるので新しい意見を知ることができたから。         |

### 【2年アンケート具体的回答例】

|  |
|--|
| 自分の主観は「自分」が「他人」が「自分」が、客観的に考えることが以前よりできるようになったと思う。他人優先、自分優先、という物の見方でなく、他人も自分も納得できる話し合いができるようになった。 |
| 他の人と自分の意見を比べることが新しい発見がある。特に、自分の意見を見直したりすることができた。   |
| 私には人と関わり合う中で、人それぞれが個性と意見があるから、人の意見をきく自分の意見と比べてみることで、気づきや行動ができた。                                  |
| 自分の意見だけでなく、他の人の意見も聞いて、共有し合うことができた。人それぞれ価値観で考え方に違いがあることに気づいた。                                     |

## 3 hyper-QU

### QU 学級満足度尺度 (全国平均)

|          | 1年  |           | 2年  |           | 3年  |           |
|----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|
|          | 前期  | 後期 (全国平均) | 前期  | 後期 (全国平均) | 前期  | 後期 (全国平均) |
| 学級生活満足群  | 60% | 54% (41%) | 63% | 56% (41%) | 57% | 62% (41%) |
| 非承認群     | 10% | 9% (18%)  | 9%  | 9% (18%)  | 8%  | 8% (18%)  |
| 侵害行為認知群  | 14% | 18% (13%) | 10% | 11% (13%) | 13% | 12% (13%) |
| 学級生活不満足群 | 16% | 19% (28%) | 18% | 23% (28%) | 21% | 19% (28%) |

### ソーシャルスキル結果

|          | 1年    |               | 2年    |               | 3年    |               |
|----------|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|
|          | 前期    | 後期 (全国平均)     | 前期    | 後期 (全国平均)     | 前期    | 後期 (全国平均)     |
| 「配慮」尺度   | 33.5% | 32.9% (31.8%) | 33.7% | 33.4% (31.8%) | 33.8% | 34.1% (31.8%) |
| 「かかわり」尺度 | 30.1% | 29.8% (29.0%) | 30.2% | 29.9% (29.0%) | 30.1% | 30.8% (29.0%) |

## 4 ふれあいひろば

| R2~R5, 1までのふれあいひろば出席数に対する午後利用率 (%) |          |                     |        |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|------------------------------------|----------|---------------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 学年                                 | 学年出席数(名) | 学年出席者のふれあいひろば出席数(名) | 利用率(%) | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月    | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 1月    | 2月    | 3月    |
| R2                                 | 36       | 20                  | 55.5   | 15.15 |       | 20.23 | 10.87 | 5.83  | 28.44 | 38.77 | 41.56 | 47.08 | 48.90 | 41.28 | 51.90 |
| R3                                 | 42       | 21                  | 50     | 52.46 | 33.66 | 39.05 | 43.02 | 33.02 | 33.07 | 43.89 | 42.33 | 49.33 | 40.55 | 38.88 | 30.72 |
| R4                                 | 50       | 20                  | 40     | 23.80 | 24.42 | 28.44 | 46.15 | 45.00 | 36.39 | 31.25 | 28.83 | 32.14 | 14.29 | 24.47 | 10.00 |
| R5                                 | 41       | 20                  | 48.7   | 35.33 | 42.72 | 51.56 | 46.15 | 65.71 | 40.35 | 53.14 | 52.31 | 48.43 | 49.58 |       |       |

## 5 いじめ、不登校、暴力行為等の認知件数

|                 | 長期欠席<br>(人) | 現在の<br>長期欠席<br>数<br>(1月末) | 不登校<br>(人) | 現在の<br>不登校<br>数<br>(1月末) | ふれあい<br>利用者数<br>(人) | 現在の<br>利用者<br>数<br>(1月末) | いじめ<br>(件) | 現在の<br>いじめ<br>認知件数<br>(1月末) | 暴力<br>行為<br>(件) | 現在の<br>暴力行為<br>件数<br>(1月末) | 現在の<br>特別な指導<br>件数<br>(1月末) |
|-----------------|-------------|---------------------------|------------|--------------------------|---------------------|--------------------------|------------|-----------------------------|-----------------|----------------------------|-----------------------------|
| 令和5年度<br>(数値目標) | (50)        | 57                        | (40)       | 41                       | (30)                | 30                       | (20)       | 13                          | (15)            | 9                          | 8                           |
| 前月比             |             | +2                        |            | 0                        |                     | 0                        |            | +1                          |                 | 0                          | +1                          |

## 5 研究成果

## 1 成果

- ・ 道徳的価値の理解を基にすべての教育活動で、自己を見つめ、自分ごととして関わり、多面的な見方・考え方ができる指導の工夫・改善を行う中で、生徒の「課題について協働して解決に向けて取り組む姿」「グループ学習で自分の考えを自分の言葉で表現し、生徒間で考えを引き出すような問いかけをする姿」「互いに教え合ったり、聞き合ったりなど生徒同士がコミュニケーションを取りながら思考を整理していく姿」「生徒が自分の考え以外を聞き、新たなことに気づけたり、話し合いからさらに別の視点を発見する姿」が見られた。
- ・ 授業において、タブレットで多様な意見の共有を行ったり、調べ学習の成果を共同編集でスライドにまとめて発表したりするなど、タブレットを活用した「関わり合う学び合い」のある学習活動を行うことにより、自分のペースで、また意欲的な学びへとつながり学習が深まった。
- ・ 自作のアンケートから、100%の生徒がペアやグループ活動の中での「関わり合う学び合い」を「楽しい」と感じており、96%以上の生徒が肯定的に評価している。
- ・ hyper-QU の結果を分析する研修を通しての生徒の状況把握や、年3回の教育相談のうちの1回を生徒がより相談しやすい先生を選んで行う形の教育相談を行うことで、一人の生徒に対して複数の教員が関わり、情報交換を行う機会をつくることで生徒理解を深めた。これらを生徒同士の「関わり合う学び合い」を支える授業の形態や場面設定に活かした。
- ・ ふれあいひろばでは、作業等を通して人間関係づくりを行った結果、登校日や利用時間の増加が見られた。また、生徒の中には、担任の声かけやクラスメイトのアプローチにより、修学旅行の事前の取組や修学旅行に参加できた生徒、進路を見据えて段階的に教室での授業への参加を増やし教室復帰できた生徒もみられた。

## 2 課題

- ・ 生徒に「何のために話し合うのか」「何のための活動なのか」をわかりやすく提示するためにも、目標と指導と評価の一体化をさらに進め、生徒の豊かな学びにつなげていく。
- ・ 3年生の hyper-QU では「人と仲良くする方法を知っている」の項目が全国平均より+27ポイントという成果が出たように、1・2年生も3年間を通して、「関わり合う学び合い」の学習活動を通して、課題解決や自身の成長を実感できるような活動を積み重ねていきたい。
- ・ 不登校生徒自体は減っていない現状があるため、担任だけではなく組織としての動きづくりの強化や興味関心の変容の見取りが必要である。